OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	形容詞の形容動詞化と形容動詞の形容詞化
Author(s)	蜂矢, 真郷
Citation	語文. 2001, 75-76, p. 12-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68972
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

形容詞の形容動詞化と形容動詞の形容詞化

蜂矢真郷

一

形容詞語幹が接尾辞を伴って形容動詞語幹を構成することがある。これを、仮に形容詞の形容動詞化と呼ぶことにする。「形容詞の」と呼ぶことも「形容動詞化」と呼ぶことも、それぞれ「語幹」と示さない点で正確な表現ではないが、便宜上このように呼んでおく。

ここに、接尾辞ゲを末尾に持つ形容動詞語幹をゲ型語幹と呼ぶことにするが、形容詞語幹が接尾辞を伴って構成される形容動詞語幹には、まずゲ型語幹がある。ゲ型語幹の語基の全てが形容詞語幹である訳ではないが、形容詞語幹であるものが大部分を占める。[1]

例は多く、源氏物語に見えるものだけでも次のようである。[2]（複合形容詞などの一部を「～」と略して示すことがある）。

（～）フカゲ［深］、ミジカゲ［短］、ウルサゲ［煩］、（～）カタ（ガ）ゲ［難］、ラウタゲ、ネブタゲ［睡］、（～）イタゲ［痛・甚］、メデタゲ、ネタゲ［妬］、ウシロメタゲ、（～）ナゲ［無］、～ナゲ［甚］］、（～）ヲサナゲ［幼］、キタナゲ［穢］、（～）スクナゲ［少］、（～）セバゲ［狭］、ツラゲ、（～）ヨワゲ［弱］、モノウゲ［憂］、（～）ニクゲ［憎］、（～）ヤスゲ［安］、アツゲ［暑］、アヤフゲ［危］、シブゲ［渋］、（～）サムゲ［寒］、タユゲ［弛］、マバユゲ［眩］、（～）スゴゲ［凄］、カシコゲ［賢・畏］、（～）ココロボソゲ［心細］、イザトゲ［寝聡］、ケウトゲ［気疎］、タフトゲ［尊］、（～）トホゲ（ド）［遠］、クチオモゲ［口重］、（～）ヨゲ［良］、（～）ツヨゲ［強］、（～）キヨゲ［清］、カロゲ［軽］、ツユケゲ［露］、トコロセゲ［所狭］、ウタテゲ［転］、シフネゲ［執念］、ナメゲ［無礼］（以上、ク活用形容詞語幹＋ゲ）

（～）アシゲ［悪］、サカシゲ［賢］、カカヤカシゲ［嚇］、（～）サワガシゲ［騒］、ナツカシゲ［懐］、（～）ハヅカシゲ［恥］、（～）ムツカシゲ、ユカシゲ、イソガシゲ［忙］、（～）ヲカシゲ、（～）ナゲカシゲ［歎］、～メカシゲ、ハラダタシゲ［腹立］、（～）アワタダシゲ［慌］、オモダタシゲ［面立］、（～）カナ（ガ）シゲ［悲］、カタクナシゲ［頑］、～ガハシゲ、ニツカハシゲ［似附］、ニギハハシゲ［賑］、アナヅラハシゲ［侮］、ワヅラハシゲ［煩］、マギラハシゲ［紛］、ソシラハシゲ［誇］、ウルハシゲ［麗］、モノオモハシゲ［物思］、タダヨハシゲ［漂］、ウケハシゲ［詛］、～マジゲ、～ガマシゲ、アサマシゲ、スサマジゲ、メザマシゲ［目覚］、ナヤマシゲ［悩］、アラマシゲ［荒］、ツツマシゲ［慎］、ムツマシゲ［睦］、ウトマシゲ［疎］、（～）コノマシゲ［好］、アヤシゲ［奇］、クヤシゲ［悔］、アラアラシゲ［荒荒］、アタラシ

ゲ［可惜］、ホコラシゲ［誇］、サウザウシゲ［寂］、ウツクシゲ、スズシゲ［涼］、ユユシゲ、(～)クルシゲ［苦］、カドカドシゲ［才才］、タドタドシゲ［辿辿］、コトゴトシゲ［事事］、モノシゲ、モノモノシゲ、ホシゲ［欲］、～マホシゲ、イトホシゲ、タノモシゲ［頼］、オソロシゲ［恐］、ヨロシゲ［宜］、(～)ヲシゲ［惜］、ツキヅキシゲ、(～)サビシゲ［寂］、ワビシゲ［侘］、ウヒウヒシゲ［初初］、イミジゲ、カケカケシゲ［懸懸］、(～)ウラメシゲ［恨］、ナレナレシゲ［馴馴］、ハレバレシゲ［晴晴］、ウレシゲ［嬉］、ホレボレシゲ［惚惚］、ユヱユヱシゲ［故故］

（以上、シク活用形容詞語幹＋ゲ）

ク活用形容詞語幹のものも、シク活用形容詞語幹のものも多く見え、むしろ後者の方がより多い。また、複合形容詞語幹のものもかなり見える。従って、形容詞語幹が三音節以上のものも当然多いことになる。と言うよりも、それが一・二音節のものはより少ない。あるいは、ナゲ［無］・ヨゲ［良］のように、それが一音節のものがあることが、むしろ注意される。

接尾辞ゲを伴うことは、中古の和文における形容詞の形容動詞化のかなり一般的な方法であったと見られる。ただ、訓点資料におけるゲ型語幹の例は極めて少ない。(3)

二

接尾辞カを末尾に持つ形容動詞語幹をカ型語幹と、ヤカ（ヨカを含む）を末尾に持つそれをヤカ型語幹と、ラカ（ロカを含む）を末尾に持つそれをラカ型語幹とそれぞれ呼んで、ヤカ型語幹・ラカ型語幹をカ型語幹に含まないこととし、これらを合わせ呼ぶ際にカ（・ヤ・カラカ）型語幹と呼ぶことにするが、(4)形容詞語幹が接尾辞を伴って構成される形容動詞語幹には、右に見たゲ型語幹の他にカ（・ヤカ・ラカ）型語幹がある。なお、カ（・ヤカ・ラカ）型語幹の語基は、形容詞語幹のものもそうでないものもある。

この場合に、形容詞語幹が伴う接尾辞は何であるかが些か問題になる。カ型語幹は接尾辞カを伴うものであるが、ヤカ型語幹は、接尾辞ヤを伴いさらに接尾辞カを伴うととらえられるもの（本来型）と、肥大した接尾辞ヤカを伴うととらえられるもの（応用型）とがあり、ラカ型語幹は、接尾辞ラを伴いさらに接尾辞カを伴うととらえられるもの（本来型）と、肥大した接尾辞ラカを伴うととらえられるもの（応用型）とがある。(5)よって、ヤカ型語幹・ラカ型語幹については、本来型と応用型とを分けて挙げることにする。

具体的な用例は基本的に以前に挙げたので、(6)ここには比較的古い例の出典のみを示すことにする。ゲ型語幹と異なり、和文に偏ることはない。以下に見るように、ク活用形容詞語幹のものが多いので、シク活用形容詞語幹のものには◇印を付しておいた。

(1)カ型語幹〈形容詞語幹＋カ〉

ヤスカ［ウシロヤスカ］（宇津保物語・吹上上）(7)、ユルカ（名義抄）(8)、シルカ（狭衣物語）、クボカ（新撰字鏡）、マロカ（節用集・易林本）／ヤフサカ（書陵部蔵論語四嘉暦二年点）／◇マサシカ（古今著聞集三三一）

(2)ヤカ型語幹（本来型）〈［形容詞語幹＋ヤ］＋カ〉

ワカヤカ（山田嘉造氏旧蔵弥勒上生経賛平安初期点）、ナゴヤカ（東大寺諷誦文稿）、ニコヤカ（新撰字鏡）、ニコヨカ（萬四三〇九）四三三

(3)同（応用型）〈形容詞語幹＋ヤカ〉

タカヤカ（蜻蛉日記）、ナガヤカ（山田嘉造氏旧蔵弥勒上生経賛平安初期点）、チカヤカ（源氏物語・初音）、ユルヤカ（運歩色葉集）、ホソヤカ（山田嘉造氏旧蔵弥勒上生経賛平安初期点）、トホヤカ（夜の寝覚）、クボヤカ（今昔物語集二十八5）、オモヤカ（名語記）、キヨヤカ（日葡辞書・補遺）、カロヤカ（太平記二十三大森彦七事）、アヲヤカ（枕草子）／ミジカヤカ（栄花物語二十二）、チヒサヤカ（落窪物語）、スクナヤカ（苔の衣三）、ミニクヤカ（源氏物語・浮舟）、ハシタナヤカ（同・夕顔）／◇ヲカシヤカ（同・少女）、◇ヨロシヤカ（浜松中納言物語）、◇オトナシヤカ（保元物語）、◇マコトシヤカ（曽我物語）、◇イカメシヤカ（仮・太閤記七秀吉四国退治之事）

(4)ラカ型語幹（本来型）〈［形容詞語幹＋ラ］＋カ〉

アカラカ（山田嘉造氏旧蔵弥勒上生経賛平安初期点）、タカラカ（落窪物語）、アサラカ（萬二九六六）、カタラカ（続後紀承和三年五月宣命）、コハラカ（平家物語）、ハヤラカ（宇治拾遺物語）、ニクラカ（源氏物語・若菜上）、ヤスラカ（山田嘉造氏旧蔵弥勒上生経賛平安初期点）、ウスラカ（宇津保物語・国譲上）、アツラカ［厚］（同・同）、カルラカ（蜻蛉日記）、ユルラカ（落窪物語）、ホソラカ（名語記）、オホラカ［多］（讃岐典侍日記）、トホラカ（今昔物語集十六21）、オモラカ（狭衣物語）、キヨラカ（宇津保物語・嵯峨の院）、カロラカ（源氏物語・夕顔）、マロラカ（同・宿木）、クロラカ（宇津保物語・蔵開上）、シロラカ（堤中納言物語）、ヒロラカ（今昔物語集二十八23）／*アララカ［粗］（蜻蛉日記）、*アララカ［荒］（源氏物語・帚木）、*クララカ（讃岐典侍日記）、*シララカ（名義抄）

(5)同（応用型）〈形容詞語幹＋ラカ〉

ワカラカ（大鏡）、アヲラカ（倭玉篇・慶長十五年刊本）、ヒキラカ（宇治拾遺物語）／ミジカラカ（平家物語）、チヒサラカ（とはずがたり）、オホキラカ（平家物語）／◇オトナシラカ（平治物語・古活字本）、◇マコトシラカ（幸若舞曲・堀川夜討）

ク活用形容詞語幹のものとシク活用形容詞語幹のものとを斜線で分け、前者について形容詞語幹が二音節のものと三音節以上のものとを斜線で分けておいた。また、今一つ(4)において斜線で分けておいたものに、*印を付したものがある。これは、一部重複形状言＋カの構成のカ型語幹ととらえられるもの(9)であるが、ラカ型語幹（本来型）ととらえることもできる(10)ので、そのようにとらえた場合として、このように挙げておいた。

右に、(5)ヒキラカ（宇治拾遺物語）を挙げたのに対して、ヒキヤカ（今昔物語集二十三21）を挙げなかった。また、(5)オホキラカ（平家物語）を挙げたのに対して、オホキヤカ（宇津保物語・吹上上）を挙げなかった。これらの扱いについては、稿を改めて述べる(11)ことにしたい。

本来型である(2)・(4)のものには、シク活用形容詞語幹のものが見えず、形容詞語幹が三音節以上のものも見えない。(1)～(5)を通して、二音節のク活用形容詞語幹のものが多く、これが基本であると見られる。さらに、(1)～(5)を通して、形容詞語幹が一音節のものが見えない。これらの点は、第一節に見たゲ型語幹の場合に、ク活用形容詞語幹のものもシク活用形容詞語幹のものも多く見え、形容詞語幹が三音節以上のものも多く、さらにそれが一音節のものがあったのと、大きく異なることになる。カ（・ヤカ・ラカ）型語幹のものの

例もかなり多いけれども、ゲ型語幹に比して制限的であると言える。

また、ゲ型語幹は上代に見えないのに対し、カ（・ヤカ・ラカ）型語幹は例は少ないが上代に見えるという差違もある。

その他、(1)のカ型語幹の例は多くない。ヤカ型語幹である(2)・(3)の例、ラカ型語幹である(4)・(5)の例は、いずれもかなり見えるが、後者ラカ型語幹の例の方が前者ヤカ型語幹の例より多く見える。形容詞語幹が接尾辞ラを伴う用法を持っているのに対して、それが接尾辞ヤを伴うものは少ないので、その差がラカ型語幹とヤカ型語幹との差にも現れたものと考えられる。[12]

そして、形容詞語幹が接尾辞ヤを伴うものの一つであるところの(2)ヤカ型語幹（本来型）の例は少ない。ナゴヤカに対して、ナゴヤ「…なごやが下に〈奈胡也我下丹〉…」（萬五二四）の例は見えるが、形容詞ナゴシ「鶏の声など、さま〴〵和うきこえたり」（蜻蛉日記 五二七）が用いられる例は少ないようである。ニコヤカ・ニコヨカに対して、ニコヤ「…柔やが下に〈尓古夜賀斯多尓〉…」（記神代・五）の例は見えるが、形容詞ニコシ「毛乃和支物毛乃荒支物」（祝詞・広瀬大忌祭・九条本）が用いられる例はさらに少ないようである。また、ワカヤカに対して、ワカヤ「水葉稚之」（神功前紀・熱田本）の例がないではないが、むしろ、ワカヤカが本来型として認められるのは、動詞ワカユ「弥若叡尓御若叡坐」（祝詞・出雲国造神賀詞・九条本）の例の見えることによっている。[13]

(3)ヤカ型語幹（応用型）のものは、多くが応用型の中の直接型[14]のものであると見られる。すなわち、応用型の中の肥大的代入型[15]のものはクボヤカ（今昔物語集）のみであり、同じく交替的代入型[16]のものはユルヤカ（運歩色葉集）・キヨヤカ（日葡辞書・補遺）・カロヤカ（太平記二十三大森彦七事）と時代の下るもののみである。

ヤカ型語幹の肥大的代入型のものは、カ型語幹とヤカ型語幹とが語基を共通にし、かつ、カ型語幹の接尾辞カにヤカを代入するように形成されたと見ることもできるものであるが、(1)形容詞語幹＋カのものが多くなく、その結果として(1)の語基と(3)のそれとが共通するものが少ないと考えられる。

また、ヤカ型語幹の交替的代入型のものは、ヤカ型語幹とラカ型語幹とが語基を共通にし、かつ、ラカ型語幹からラカをヤカに代えることによって形成されたと見られるものであるが、語基が形容詞語幹のものは、形容詞語幹が接尾辞ラを伴う用法を持っていることにより、むしろ、同じくヤカ型語幹[17]からヤカをラカに代えることによって形成されたと見られるところのラカ型語幹の交替的代入型の方が構成力が強いようである。

そして、(5)ラカ型語幹（応用型）のものは、応用型の中の交替的代入型のものばかりと見られる。[18]

因みに、(4)は「形容詞語幹＋ラ」＋カの構成であるが、それに関連して、形容詞語幹＋ラのものも形容動詞語幹を構成するので、例は多くないようであるが、次に挙げておく。

アカラニ「脣口は赤ラに」（西大寺蔵金光明最勝王経平安初期点・春日政治氏釈文）、ウマラニ「…うまらに〈宇麻良尓〉聞しもち食せ…」（記応神・四八）、ヤスラニ「…小嶺安らに〈己久比也須良尓〉…」（催馬楽四・夏引）、サムラニ「…和たへの衣寒らに〈服寒等丹〉…」（萬一八〇〇）、キヨラナリ「装束の清らなること」（竹取物語）、ヒロラニ「御横刀廣尓誅堅女」（祝詞・出雲国造神賀詞・九条本）／◇サカシラニ「さかしらに夏は人ま

ね…」（古今一〇四七）、◇モノガナシラニ「…もの悲しらに〈物悲良尓〉思へりし…」（萬七二三）、◇ワビシラニ「秋の虫何侘びしらに〈何佗芝良丹〉こゑのする…」（新撰萬葉集三七四）、◇ウレシラナリ「世尊の身の支（アシ）は……光り悦（ヨロコ）シラなり」（山田嘉造氏旧蔵弥勒上生経賛平安初期点・中田祝夫　築島裕氏釈文）

～ニの例も、右のキヨラナリ・ウレシラナリの例やサカシラナリ（落窪物語）の例があるので、ナリ活用の連用形と見てよいであろうか。シク活用形容詞語幹のものは、右に見えるのに対して、(4)には見えない（5)には見える）ので、右のものに対して(4)は制限的であるとも言えよう。

三

第一節・第二節に見た形容詞の形容動詞化に対して、形容動詞語幹が接尾辞を伴って形容詞を構成することがある。これを、仮に形容動詞の形容詞化と呼ぶことにする。「形容動詞の」と呼ぶことは、「語幹」と示さない点でこれも正確な表現ではないが、便宜上このように呼んでおく。

ケシを末尾に持つク活用形容詞をケシ型形容詞と呼ぶが[19]、形容動詞語幹が接尾辞を伴って構成される形容詞には、ケシ型形容詞がある。ケシ型形容詞のうち、カ（・ヤカ・ラカ）型語幹との対応を持つものを一次的ケシ型と、その対応を持たないものを二次的ケシ型と呼ぶが[20]、形容動詞の形容詞化に当たるのは一次的ケシ型であり、それが大部分を占める。

その場合に、ケシ型形容詞のケの甲乙が知られるものはいずれも乙類であるところから[21]、この構成はカ（・ヤカ・ラカ）型語幹＋i＋シのように示されることがある[22]。ケシ型形容詞の語幹は、語幹の用法があまり顕著でなく、サヤケサ「…音（ネ）のさやけさ〈於止乃佐也計左〉…」（催馬楽三二・真金吹く）・ハルケサ「…みちのはるけさ」（土左日記）などのように接尾辞サを伴うものが見えることや、イササケワザ「なほしもえあらで、いさゝけわざせさす」（同）・アハツケビト「あはつけ人だに、寝覚（ねざめ）しぬべき空の気色（けしき）を」（源氏物語・夕霧）のように下の名詞と複合するものが若干見えることぐらいであるが、それでも語幹の用法が全く見えない訳ではないので、これを形容詞語幹として切り出してみることにすると、形容動詞語幹が接尾辞iを伴って形容詞語幹を構成すると言ってもよい。

これも、具体的な用例は基本的に以前に挙げたので[23]、ここには比較的古い例の出典のみを示すことにする。

(a)サダケシ（平中物語）、ユタケシ（萬四三六二）、コマケシ（新撰字鏡）、サヤケシ（萬三二三四）、ケヤケシ（源氏物語・胡蝶）、ヒラケシ［ツバヒラケシ・ツマビラケシ］（天理図書館蔵金剛波若経集験記平安初期点）[24]、シヅケシ（萬三八八）、ハルケシ（萬三九八八）、ユルケシ（堀河百首七）、カソケシ（萬四二九一）、ノドケシ（古今八四）、タシケシ（萬四〇九四）／イササケシ（推古紀十二年・岩崎本平安中期点）、アタタケシ（新撰字鏡・享和本）、アハツケシ（源氏物語・空蟬）、オゴソケシ（山田嘉造氏旧蔵弥勒上生経賛平安初期点）

(b)サハヤケシ（新撰字鏡・群書類従本）、ナハヤケシ（新撰字鏡）、コマヤケシ（石山寺蔵大般涅槃経九平安中期点）、ニコヤケシ（新撰字鏡）、タヲヤケシ（加茂保憲女集・序）、スミヤケシ（興聖寺蔵大唐西域記十二平安中期点）・スムヤケシ（萬三七四八）、ヒヘ

ヤケシ（新撰字鏡）

(c)アカラケシ（記応神・四二）、アザラケシ（仁徳前紀・前田本）、ヤハラケシ（字鏡）、ヤスラケシ（祝詞・大殿祭・卜部兼永本）、アキラケシ（萬四四六六）、タヒラケシ（萬四四〇八）、ナビラケシ（新撰字鏡）、ナメラケシ（同）、ソソロケシ（新訳華厳経音義私記）

(a)はカ型語幹と対応するもの[25]、(b)はヤカ型語幹と対応するもの、(c)はラカ型語幹と対応するものである。その際に、カスカ―カソケシ、スミヤカ―スミヤケシ・スムヤケシ、ヘヘヤカ―ヒヘヤケシはその対応の中に母音交替を含むものである。

右のように、ケシ型形容詞のものはかなりの例が見えて、形容動詞の形容詞化としてある程度一般的な方法かと思われるが、カ（・ヤカ・ラカ）型語幹＋ナリの形容動詞の方がケシ型形容詞よりよく用いられることによって、この形成は平安後期以降衰えて行く。

四

形容詞の形容動詞化の上に形容動詞の形容詞化が重なることがある。つまり、形容詞の形容動詞化によって形成されたところの形容動詞がさらに形容詞化されることがある。

アカシ（伊勢物語）―アカラカ（山田嘉造氏旧蔵弥勒上生経賛平安初期点）[26]―アカラケシ（記応神・四二）

ヤスシ（記允恭・七八）―ヤスラカ（山田嘉造氏旧蔵弥勒上生経賛平安初期点）―ヤスラケシ（祝詞・大殿祭・卜部兼永本）

のような［［形容詞語幹＋ラ］＋カ］＋i＋シの構成のケシ型形容詞アカラケシ・ヤスラケシがそれである。これらは、アカ（シ）→アカラカ、ヤス（シ）→ヤスラカの形成が第二節に見た形容詞の形容動詞化に当たり、アカラカ→アカラケシ、ヤスラカ→ヤスラケシの形成が第三節に見た形容動詞の形容詞化に当たる。それぞれの例の見える時代に拘わらず、理論的にこのようであると言える。今一つ、

ユルシ（皇極紀四年六月・岩崎本平安中期点）―ユルカ（名義抄）―ユルケシ（堀河百首七）

のような［形容詞語幹＋カ］＋i＋シの構成と見られそうなケシ型形容詞ユルケシがあるが、以前に述べたように[27]、形容詞ユルシから形成された二次的ケシ型形容詞ユルケシから、カ（・ヤカ・ラカ）型語幹とケシ型形容詞との対応との類推によってユルカが形成されたととらえられるので[28]、形成の順序としては異なることになる。

つまり、形成の順序を考慮すると、形容詞の形容動詞化の上に形容動詞の形容詞化が重なるものは(4)［形容詞語幹＋ラ］＋カの形容動詞語幹のもののみに見えることになるが、ケシ型形容詞が主に見えるところの平安中期以前の形容動詞語幹の例を見ると、(1)～(5)の中では(4)がアカラカ・タカラカ・アサラカ・カタラカ・ヤスラカ・ウスラカ・アツラカ［厚］・カルラカ・ユルラカ・キヨラカ・クロラカ・シロラカ（およびアララカ［粗］）と最も例が多いので、当然の傾向と言えることになる。

他方、逆に、形容動詞の形容詞化の上に形容詞の形容動詞化が重なること、つまり、形容動詞の形容詞化によって形成されたところの形容詞がさらに形容動詞化されることは、ないようである。［カ（・ヤカ・ラカ）型語幹＋i］＋ゲの構成のゲ型語幹が見えるならば、第三節に見た形容動詞の形容詞化の上に第一節に見た形容詞の形容動詞化が重なるものになるが、望月郁子氏「形容動詞と形容詞の語

形の変遷について」[29]が「～カ型を持つ場合には、～ゲ型を持つことはない」と指摘されるように、一次的ケシ型形容詞語幹「カ（・ヤカ・ラカ）型語幹＋i」は、接尾辞ゲを伴うことがない。尤も、

などかうは遥けゞにはの給へる（宇津保物語・国譲下）

まことにいとはるけゞなり（落窪物語）

のようなハルケゲの例があるとされることはあるが、いずれも本文に問題のあるところであり、宇津保物語の例ははっきりしないが、落窪物語の例は恐らくハルカゲの誤りではないかと見られる。なお、望月氏は、「～カ型は～ゲ型と重なっては存在しない」とされて、カ（・ヤカ・ラカ）型語幹＋ゲの形がありにくいことも指摘されているが、アタタカゲ（宇津保物語・俊蔭、源氏物語・末摘花）、ハルカゲ（枕草子、栄花物語三）、（～）ノドカゲ（栄花物語十一、十二）などが[30]が見える。これらのことについては、別に稿を改めて[31]今少し詳しく述べることにしたい。

また、これに対して二次的ケシ型形容詞語幹は、ムクツケゲ（竹取物語、蜻蛉日記、枕草子、堤中納言物語）、ツユケゲ（源氏物語・夕顔）、シホドケゲ（夜の寝覚、狭衣物語、栄花物語二十二）のように接尾辞ゲを伴うことがあるが、二次的ケシ型形容詞の形成は形容動詞の形容詞化に当たらないので、形容詞の形容動詞化の上に形容動詞の形容詞化が重なるものとは言えない。

以上、本稿は、形容詞語幹が接尾辞を伴って形容動詞語幹を構成すること、および、形容動詞語幹が接尾辞を伴って形容詞（語幹）を構成すること、ならびに、両者の重なり具合について、すなわち、形容詞語幹と形容動詞語幹との相互の派生関係について見た。

注

（1）柄澤明子氏「中古物語文学における形容動詞の語構成について」（「中央大学国文」27［1984・3］）、漆谷広樹氏「『形容動詞』語幹構成要素の『ゲ』に関する一考察」（「専修国文」42［1988・2］）、村田菜穂子氏「ゲナリ型形容動詞――造語力拡大の様相について――」（『国語語彙史の研究』18［1999・3 和泉書院］）など参照。

（2）～＋助動詞マジ・マホシ＋接尾辞ゲのものを含む。

（3）築島裕氏『平安時代の漢文訓読語につきての研究』［1963・3 東京大学出版会］第二章第三節七参照。「威厳トシテ肅（オゴソカ）ニ然（サ）ニマシマス。」（石山寺蔵大唐西域記長寛元年点・中田祝夫氏釈文）などの例が僅かに見える。

（4）前稿[A]㈠「ヤカ型語幹の構成」（「ことばとことのは」8［1991・12］）・㈡「カ型語幹の構成」（『国語語彙史の研究』17［1998・8 和泉書院］）・㈢「ラカ型語幹の構成」（『森重先生喜寿記念 ことばとことのは』［1999・3 和泉書院］）・㈣「ヤカ型語幹とラカ型語幹」（『国語論究』7 中古語の研究［1998・12 明治書院］）・㈤「ヤク（ヤグ）・ラク（ラグ）」（『国語語彙史の研究』18［前掲］）・㈥「カ・ヤカ・ラカ型語幹の語基」（『同』19［2000・3 和泉書院］）、および、別稿㈠「語構成と形状言」（「語文」（大阪大学）65［1996・2］）・㈡「複合形状言・派生形状言」（『国語語彙史の研究』16［1996・10 和泉書院］）では、カ型語幹・ヤカ型語幹・ラカ型語幹のそれぞれについて考える必要などから、カ・ヤカ・ラカ型語幹と呼び、また、前稿[A]㈦「形容詞語幹＋カ・ヤカ・ラカ」（「研究年報」（奈良女子大学文学部）32［1989・3］）・㈧「～＋カの一形態――語基末がイ列・エ列の場合――」（「叙説」16［1989・10］）、および、前稿[B]㈠「ケシ・カシイ・カイ」（『同志社国語学論集』［1983・5 和泉書院］）・㈡「アキラケシイ――ケシ・カシイ・カイ統考――」（「帝塚山学院大学日本文学研究」18［1987・2］）・㈢「カ・ク・ケシ」（「叙説」14［1987・10］）・㈣「カ・ク・グ」（『国語語彙史の研究』14［1994・8 和泉書院］）では、後に挙げるケシ型形容詞との関係を考える必要などから、ヤカ型語幹・ラカ型語幹を含めてカ型語幹と呼んで、統一的に呼ばないままであったが、両者の問題を考慮して、改めてカ（・ヤカ・ラカ）型語幹と呼ぶことにしたい。

（5）前稿[A]㈠・㈡・㈢・㈣・㈤・㈥参照。

（6）前稿[A]㈠・㈡・㈢・㈣および㈦・㈧

（7）ヤスカ（宇津保物語・吹上上）として挙げた例は、ウシロヤスカの形で用いられているが、前稿[A]㈥に述べたように、カ型語幹の語基は他に四音節以上のものが見えないので、ヤスカとして挙げることにする。

(8) 後に第四節（注(28)箇所）でユルシ・ユルカ・ユルケシについて述べる箇所参照。

(9) アララカ［粗］・アララカ［荒］は、縮重複形状言＋カの構成のカ型語幹ととらえることもできる。前掲[A](二)参照。なお、縮重複形状言・一部重複形状言については、『国語重複語の語構成論的研究』［1998・4 塙書房］第三篇第一・二章参照。

(10) 前稿[A](六)参照。なお、ユルルカ（蟐蛉日記）は、一部重複形状言＋カの構成のカ型語幹ととらえられるものであるが、ラカ型語幹ではないので、ここには挙げていない。

(11) 続稿(一)「形容詞ヒキシ・オホキイ等とその周辺」（『日本語学と言語学』［2001・10 明治書院、予定］）

(12) 橋本四郎氏「ク活用形容詞とシク活用形容詞」（『橋本四郎論文集』国語学編［1986・12 角川書店］、もと「女子大国文」5［1957・3］）、「上代語概説」（『時代別国語大辞典上代編』）第三章四の「形容詞」の項（第三章は主として浅見徹・橋本両氏執筆）、松村明氏編『日本文法大辞典』の「形容詞」の項（山口佳紀氏執筆）など、および、別稿(三)「形容詞語幹の用法」（『井手至先生古稀記念論文集』国語国文学藻』［1999・12 和泉書院］）参照。

(13) 前稿[A](四)参照。

(14) 前稿[A](一)・(二)・(三)・(四)参照。

(15) 前稿[A](三)・(四)参照。前稿[A](一)・(二)で「代入型」と呼んだものに当たる。

(16) 前稿[A](三)・(四)参照。前稿[A](七)をも参照。

(17) このヤカ型語幹の例は基本的に(2)・(3)に挙げた。また、(2)・(3)に挙げていないヒキヤカ・オホキヤカについては続稿(一)に見る。

(18) 前稿[A](七)・(三)参照。

(19) 前稿[B](一)・(二)・(三)参照。但し、ケが甲類のタケシ［武］を含まない。

(20) 前稿[B](一)参照。後に注(31)に挙げる続稿(二)をも参照。

(21) タケシ［武］をケシ型形容詞に含まないのはこのことによる。

(22) 森山隆氏「上代における連母音［ai］の転化について」（『上代国語の研究――音韻と表記の諸問題――』［1996・11 桜楓社］、もと「国語学」28［1957・3］）、山崎馨氏『形容詞助動詞の研究』［1992・2 和泉書院］前篇第一・三・五章（それぞれ、もと「美夫君志」6［1963・6］、『研究資料日本文法』3用言編(二)［1984・10 明治書院］、「武蔵野文学」22［1974・12］）、川端善明氏『活用の研究』II第二部第五・六章［1979・2 大修館書店、1997・4 増補再版 清文堂出版］、山口佳紀氏『古代日本語文法の成立の研究』［1985・1 有精堂］第二章第二・七節（もと「国語と国文学」58―5［1981・5］など）、など参照。

(23) 前稿[B](一)・(二)

(24) ヒラケシとして挙げた例は、ツバヒラケシ・ツマビラケシの形で用いられているが、前稿[A](三)に述べたように、対応するツバヒラカ・ツマビラカはツバ・ツマ＋ヒラカの構成と見られて、前稿[A](六)に述べたように、ラカ型語幹ではなくカ型語幹と対応すると見るのがよいと考えられる。

(25) ユルケシと対応するユルカは、ユルケシが第四節（注(28)箇所）に述べるように形成されたものであるけれども、ユルカ―ユルケシの対応を持つことになるので、また、オゴソケシと対応するオゴソカは、前稿[A](二)に見たようにソカ型語幹と見られるが、ソカ型語幹の例は少ないので、それぞれ便宜上カ型語幹に括っておく。

(26) 後に見る望月郁子氏論文（注(29)箇所）は、アカシ―アカラカ―アカラケシの他に、ケシ―ケヤカ―ケヤケシを挙げられるように見えるが、ケシはシク活用であるのでケシのケは形容詞語幹ではなく、また、ケヤカはケヤ＋カの構成と見るのがよいと考えられる（前稿[A](二)）ので、ここには挙げない。

(27) 前稿[A](二)

(28) ユルカ（名義抄）が存在するにも拘わらず、ユルヤカ（運歩色葉集）を、第二節でヤカ型語幹の肥大的代入型ではなく交替的代入型ととらえたのは、このことによる。

(29) 「日本文学誌要」13［1965・11］

(30) 異本の例を含めると、ハナヤカゲサ（源氏物語・絵合・保坂本）、ニホヒヤカゲサ（同・胡蝶・大島本）、ウララカゲサ（同・初音・肖柏本他）、フクラカゲサ（紫式部日記・宝永本）のような～カゲサの形の例が見える（前稿[B](一)参照）。

(31) 続稿(二)「一次的ケシ型と二次的ケシ型」（『国語語彙史の研究』20［2001・3 和泉書院、予定］）

キーワード：形容詞語幹　形容動詞語幹　ゲ型語幹
カ（・ヤカ・ラカ）型語幹　ケシ型形容詞

――本学大学院教授――